青年期の愛着スタイルと情動知能が社会的スキルに及ぼす影響

臨床心理学専修　P07601　**大宅　洋行**
（指導教員　玉瀬耕治教授・大久保純一郎教授）

問　　題

対人関係を円滑に進めるための技能（菊池, 1988）をさす社会的スキルは、その定義が研究者により様々である。相川（2000）はこれまでの定義をまとめ、社会的スキルの生起過程モデルを提唱した。その中で、社会的スキーマからの影響を強調している。社会的スキーマは対人関係に関する様々な知識の総体のことをいう。Bowlbyは愛着理論の中で内的作業モデルを提唱し、幼児期における母子間での心理的・情緒的な結びつきはその後の社会的・感情的な発達にとって重大なものとする対人関係の基本的な枠組みを想定した。また、情動知能とは情動の知覚、情動と情動の理解、情動の制御といった能力を柱とする概念である。情動知能と青年期の愛着スタイルは、互いに関連し合いながら社会的スキルに影響を及ぼすであろうと考えられるが、現時点ではあまり研究がなされていない。

方　　法

調査対象　近畿圏の大学生167名（男性61名、女性105名、無回答1名）平均年齢は19.63歳（*SD*=4.19）であった。

調査内容　質問項目は以下のとおりである。デモグラフィックな特徴を問う項目群は表紙に配置した。

①一般他者版成人の愛着スタイル尺度ECR-GO（中尾・加藤, 2004）：一般他者を想定した愛着スタイル尺度（30項目7件法）。

②4分類愛着スタイル尺度RQ（加藤, 1998/1999）4分類の愛着スタイルを測定するための強制選択式尺度。

③社会的スキル測定尺度KiSS-18（菊池, 1988）：社会的スキルを測定する尺度（18項目5件法）。

④情動知能尺度EQS（内山ら, 2001）：情動知能を測定する尺度。「自己対応」「対人対応」「状況対応」という3つの領域が測定される（65項目5件法）。

結　　果

ECR-GOの因子分析の結果、先行研究（中尾・加藤, 2004）と同様、2因子が抽出され「見捨てられ不安（α=.86）」「親密性の回避（α=.91）」と命名した。KiSS-18は固有値の推移から考え1因子抽出により因子分析を行った。因子負荷量、解釈可能性から考え18項目で1因子とし「社会的スキル（α=.90）」と

命名した。また、EQSをマニュアルに従って得点化し、各領域の得点を決定した。EQSの尺度間の相関を測定した結果、自己対応領域、対人対応領域、状況対応領域とその他のサブスケール間で高い相関が得られ、内山（2001）と同様の結果が得られた。

4つの愛着スタイルの違いから情動知能の各領域の能力や、社会的スキルの遂行の程度に差があるかを検討するため、EQSおよびKiSS-18の各下位尺度に対するRQの分散分析の結果、「社会的スキル」のみ主効果が有意であった（$F(3, 145)=6.59$）ため、多重比較を行った。その結果、「安定型」は、その他の愛着スタイルに比べて、「社会的スキル」が有意に高かった。

次に、青年期の愛着スタイルの2因子と情動知能の3領域が社会的スキルに影響を及ぼすであろうという一連のモデルを想定しパス解析を行った（**図1**）。具体的には、ECR-GOの親密性の回避と見捨てられ不安の得点を説明変数とし、EQSの各領域得点を目的変数とする重回帰分析（強制投入法）を行い、次にECR-GOの下位尺度得点とEQSの各領域得点を説明変数として、KiSS-18の社会的スキル得点を目的変数として重回帰分析（強制投入法）を行った。それらの結果から、親密性の回避は対人対応領域にβ=-.33で負の影響があった（R^2=.10）。状況対応領域には、見捨てられ不安からβ=-.21、親密性の回避からβ=-.22で負の影響があった（R^2=.08）。また、社会的スキルには見捨てられ不安からβ=-.29、親密性の回避からβ=-.31で負の影響があり、情動知能の各領域のうち、対人対応領域からβ=.16、状況対応領域から、β=.46で正の影響があった（R^2=.63）。

まとめと考察

幼児期には愛着対象である養育者とのかかわりの中で愛着スタイルを形成し、その後、青年期に至るまでの間に、数多くの他者との間で対人関係に関する枠組みは作られていく。

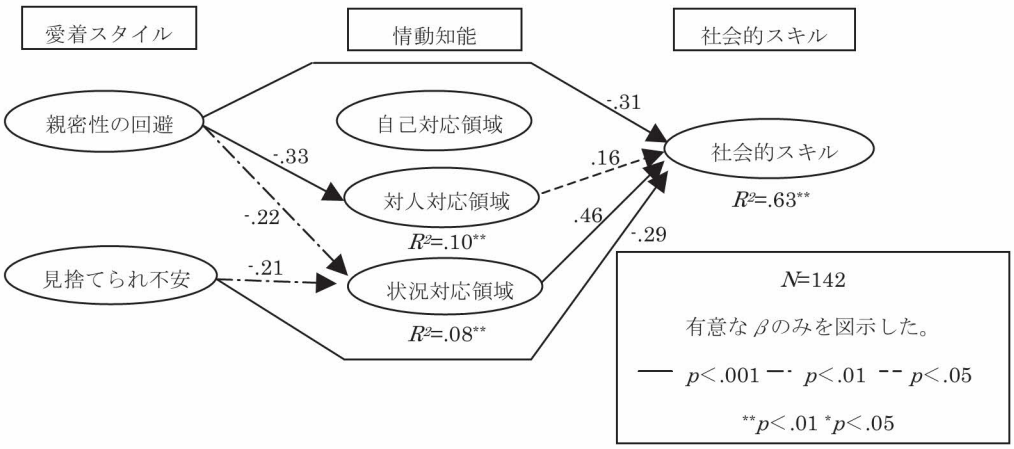

図1　愛着スタイル・情動知能・社会的スキルのパスダイアグラム

その中で、ポジティブな自己と他者のモデルの構築が重要であり、他者の情動に気付く能力や周囲の状況を適切に理解する能力が相互的に作用することで、より対人関係を円滑に進めていくことができると考えられた。

引用文献

相川　充（2000）人づきあいの技術　社会的スキルの心理学　セレクション社会心理学 - 20.サイエンス社

加藤和生（1998/1999）Bartholomewら4分類愛着スタイル尺度（RQ）の日本語版の作成．認知・体験過程研究，7，41-50.

菊池章夫（1988）思いやりを科学する．川島書店

中尾達馬・加藤和生（2004）成人愛着スタイル尺度（ECR）日本語版作成の試み．心理学研究，75，154-159.

内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子（2001）EQSマニュアル．実務教育出版